

Title	アニー・エルノーの非個人的自伝 : Les annéesにおける人稱をめぐる諸問題
Sub Title	L'autobiographie impersonnelle dans Les années d'Annie Ernaux
Author	森, 千夏(Mori, Chinatsu)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2014
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.106, (2014. 6) ,p.242 (139)- 258 (123)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01060001-0242">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01060001-0242</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# アニー・エルノーの非個人的自伝

— *Les Années*における人称をめぐる諸問題 —

森 千夏

## 1. impersonnel とは

自伝作家アニー・エルノー（1940-）は、2008年におよそ70年に渡る自己の生涯とフランス社会の変容を包括した *Les années*（以降『歲月』と表記）を発表する。作中人物は一冊の本の執筆を計画し、次のように紹介する。「彼女が impersonnel(le) な自伝として思い描いているものには、いかなる『私』もない——とはいえ、『人々』と『私たち』はある——まるで自分の番になれば、彼女がその日までの日々を語るかのよう<sup>1</sup>。」「彼女」が執筆の欲望を堅く抱き、その本のアイデアや形式を具体的に未来形で記述する作品が、読者がまさに今読み進めている本（『歲月』）であることに気付くのは、ようやく作品の最終部にたどりついたときである。

さて、エルノーが20年以上かけて実現に至った「impersonnel(le) な自伝」とは、いかなる自伝だろう。「impersonnel（英：impersonal）」は<sup>2</sup>、第一に「非個人的」という意味をもつが、「im-personnel」のように二つの要素に分解すると、「非-個別的（non-individuel）」ないし「非-私的（non-privé）」という意味にとれる。従って、「集団的（collectif）」「社会的（social）」「公衆的（public）」な性質をもつ自伝と言い換えることができる。第二に「非人格的」という意味ももつため、「自己疎外的（aliéné）」な自伝とも訳せるし、さらに個人がもつ主観に焦点を当て、「非-主観的（non-subjectif）」つまり「客観的（objectif）」な自伝と捉えることもできるだろう。第三に、言語学の分野で「l'impersonnel」という名詞は、「非人称動詞」

を意味する。そこから文法的人称の側面に注目し、「非-人称の」、「特定の個人と関連付けられない」、換言すると「第三人称」で書かれた自伝と意識することもできる。ただし先の引用文で一人称複数の使用は認めているので一考を要する。このように、「impersonnel」という語は、自伝が語自体にそもそも含み持つ自己・個人（フランス語 *autobiographie* の「aut(o)-」も自分自身を指す）のもつ特性を、先に挙げたあらゆる点において否定するものである。当事者が自己の人生、人格について物語る自伝の本質を打ち消しかねない、この「impersonnel(le) な自伝」という矛盾した表現で、エルノーは何を言わんとするのか、その意図は何なのか。

ところで、エルノーの自伝的实践は、社会学、歴史学、人類学の科学的アプローチを用いて、自己と両親を、時代と社会的環境との関係において描出することと要約することができ<sup>3</sup>、それは自己と文学的記述の膠着した自伝テキストの中に、それぞれ非自己、非文学的テキストという正反対のものを導入することで、両者の関係性を変える挑戦的な試みといえるだろう。この点を考慮すれば、『歳月』での「impersonnel」と「autobiographie」の結合も十分に予想されうるものであるし、一概に矛盾とはいえない。『歳月』の内部に目を転じれば、個人の歴史と社会の歴史がそれまでの作品とは異なる形態でもって、——「歴史的時間の経過、物質、考え、風俗、それにこの女性（＝エルノー）の私生活の変化 [が] 同時に表 [され]」、「[70年] のフレスコと、歴史の外にいる自己の探求 [が] (…) 完全に一致」(LA, p.187) するという形で——語られている。個人の歴史と社会の歴史は、一般的なジャンルの区分においては、一方が自伝、他方が回想録、年代記ないしは社会史・政治史というように、各々別のジャンルに分類される。だが両者は隣接しており、一つの作品のうちに双方が描かれることも少なく、その比重によって作品のジャンルの決定すると、フィリップ・ルジュンヌは説明している<sup>4</sup>。個人の歴史と社会の歴史は、ジェラルド・ジュネットの分類に従うと<sup>5</sup>、自己物語世界的言説と歴史的物語言説とに区別され、それぞれ異なる叙法が用いられるのだが、『歳月』の作品のモデルとして作中で挙げられている『失われた時を求めて』と『風と共に去

りぬ』は<sup>6</sup>、どちらも虚構物語（前者は自伝的虚構）に属し、前者が第一人称（等質物語世界）、後者が第三人称（異質物語世界）と異なる人称世界を採用している。『歲月』においてエルノーは、虚構を排除した自伝の場で、この二つの形式の「不可能な」融合を試みていると仮定することができるが、それは作品の主題（個人の生涯と歴史）や内容（記憶のモチーフ）のみならず、形式においてもそうであり、さらにはそれぞれの記述内容（物語言説）に対して、従来採るのとは正反対の形式を用いて、なのである。すなわち、個人の歴史を第三人称の視点（外的焦点化）から、社会の歴史を第一人称の視点（内的焦点化）から記述しているのである<sup>7</sup>。従って、『歲月』は、個人の歴史を扱った「客観的自伝」、「主体の歴史」と呼ばれるようなテキストと、社会、集団の歴史を扱った「集団の自伝」、「主観的な歴史」と呼ばれるようなテキスト、これら二種類のテキストから構成されることになる。それらはテキストの中で、空間的（断章による分離）、時間的に（異なる時制の使用）別々に、交互に、記述、配置されている。そしてテキストの内部では、個人・自己を巡る正反対の方向への運動が認められる。一方が自伝から個人の特性を排除するような動きで、もう一方が歴史に個人の特性を付与するような動きである。

本稿では、『歲月』におけるこのテキスト間、テキスト内部の力学を、形式（特に文法的人称）の角度から検討していく。

## 2. 非個人的な自伝へ

自伝を非個人性へと向かわせる動きから検討を始めよう。具体的にどのような方法で個人性は除去されるのか。エルノーは、客観的な記述の採用と自己を社会的、集団的な特徴から捉えるという二つのアプローチを行っている。

過去のエルノーである作中人物は第三人称の「彼女」によって指示される。自伝における第三人称の採用は、自伝の信憑性を脅かすものでも、虚構化のレッテルを貼るものでもないが<sup>8</sup>、作者は「過剰な外在性と距離」を表わすという理由から一定の憂慮を示し、「第三人称の『彼女』[を]、第一

人称の『わたし』から隔たった、歴史的、客観的形式」と明確に定義し直すという配慮を行っている<sup>9</sup>。作者によれば、第三人称の使用は「女の記憶と歴史、個人と集団の交差に居続ける」ことを可能にするもので、裏を返せば、第一人称の使用には限界があると考えられていることを示す。『歲月』において、第三人称は語り手の主語の不在とともに用いられているので、作中人物だけでなく、語り手としての「わたし」も不在化する。つまりエルノーの過去の作品に常に存在していた、執筆する現在の「わたし」、作家である自己が完全に消滅するといわないまでも、より不可視な存在になる。

定期的に挿入される写真は、語り手に作中人物を客観的な眼差しから捉えるのを助ける。1955年にサン・ミッシェルの寄宿舎で撮影された白黒写真の描写を見よう。

右側は、黒褐色の波打つショートヘアーの娘で、丸々した顔に眼鏡をかけ、広い額に陽光がさし、半袖の濃い色のセーターと水玉のスカート姿。二人ともバレリーナ風の靴を履いている。黒褐色の娘は靴の中は素足である。(…) スカートは余りに小さくなった前年の夏のワンピースを仕立て直して作ったもの、手編みのセーターは隣人に編んでもらったものだと断言できる。そして、記述がここで、50年代に忍び込んでいる何物かを見出し、集団的歴史が個人の記憶というスクリーン上に映し出した反映をとらえることができるのは、14歳半の眼鏡をかけた黒褐色の髪の子供によって得られた認識と感覚を用いてなのである。バレリーナ風の靴を除くと、この娘の外見に当時の「流行りもの」で目立つもの(…)は何ひとつない。(…) その後に生まれた全ての人の目には、彼女は単なる昔の人で、先行したあらゆる生が平均化されている、自己の前史に属している。(Ibid, pp.55-56)

身体的特徴や服装は細部まで正確に描写され、それらは時代の特徴（50年代に流行したバレリーナ風の靴）や社会階級（仕立て直したワンピースと手

編みのセーターは階層の低さを示す)と関連付けられ、社会的意味・価値の下で観察されている。語り手が若い世代の立場へと移行するとき、「彼女」は単なる「昔の人」、「前史の人物」に還元される。「彼女」の個人的記憶と身体的感覚(認識と感覚)はここで特権化されているものの、それは語り手が、当時の人々の生きた社会と歴史の手触りや暖かさ(あるいは冷たさ)を記述するという手段と目的のために他ならならず、個人性を強調するものではない。また、個人の生活は、ある年代に行った「彼女」の行為や瑣末な出来事などを、報告の形式で、簡潔にまとめて記述される。18歳の少女の日常は、日々の活動内容のメモ書きのように「授業後、彼に会いたくて通りを歩き、女子寮に帰り、泣く——小論文の題を前にして、理解できずに何時間も過ごす——土曜日、両親のもとに帰り、プラターズの「オンリー・ユー」を絶え間なく聞いて過ごす——パン、ビスケットやチョコレートを腹いっぱい食べる。」(Ibid, pp.78-79)と記される。「彼女」の歴史はというと、むしろ社会全体の歴史の中に織り込まれ、「われわれ」の背後に隠れてしまう。同様に、個人的な思考や欲望を通して、各年代の「彼女」の様々な関心(特に文学と男子への言及が多い。)や悩み(外見、後には仕事や夫婦生活も語られる。)などが記されるが、それらはある年代に特有で共通して見られる傾向、他者を意識したもの、自分の置かれた社会的状況に対するものが多く、独自の深い内面性を表わすものではない。(「彼女」の人格に関わる感覚の記述については、この章の後半で言及される。)このような記述の特徴は、エルノーが父と母の生涯を題材にした『場所』『ある女』の中ですでに見られたもので<sup>10</sup>、個人を「文学と社会学と歴史の間」で捉え、歴史化することを目指すものである。『歲月』での取り組みについて、作者が「歴史や社会学のように現実の把握を目的として、各々の痕跡、資料、思い出、写真、口頭証言を検討する」「ある種の自己-調査」とはっきりと明示していることから明らかだろう<sup>11</sup>。このようなテキストにおいては、客観的な視点に立つために、主観的イメージや個人的記憶は「畏」として忌避され<sup>12</sup>、個人は客観的、社会科学的な側面や集団的性質から捉えられる。それによって、個人性は限りなく希薄化し、類型化さ

れ、一般化された集団の一部へと吸収されるのである（「(…) 自分の視野から父個人の姿が消えていくような気がする<sup>13)</sup>」)。

写真が示すのは自己の客観的側面や集団的な性質だけではない。エルノーの自己自身の認識をも表現している。幼少時代の「彼女」が、赤ん坊の自分の写真を見て感じる「自分自身ではなく、別の誰かで、無声の、到達不能な時代に属する人物」(Ibid., p.31) という感情は、自己の他者性を浮き彫りにし、自己同一性を困難にする。それは、語り手が写真の「彼女」を自己と同定せず、前後の写真の関連のみを認定するという「逸脱した」所作へとつながっていく。また、年代の異なる14枚の肖像写真は、自己の不連続性と複数化をも象徴的に表わしている<sup>14)</sup>。写真の自己が示す他者性というのは、文学的人称としての第三人称がもつ性質とも合致している。作者は文学テキストにおける「第三人称の彼／彼女、それはつねに他人であって、好きなように行動することが充分許され<sup>15)</sup>」、『歲月』で「(…) 写真のこの『絶えず他人』に、記述の『彼女』が呼応 [する]」(Ibid., p.252) と述べている。換言すると、写真において自己が一枚毎に異なる人物として認識されると同様に、第三人称の「彼女」で指示される人物は、指示される度に不特定の、別の人間でありうるのである。非連続性と他者性を示す写真という装置と第三人称というこれらの形式は、さらに、非 - 存在性を特徴とするエルノーの自己意識さえも暗々裏に表現する。写真は過去の自分の現在における不在（「小さな死<sup>16)</sup>」）を示し、第三人称はいかなる主体・主語も指示しないことが可能な文法的人称である<sup>17)</sup>。そしてそれらを用いるエルノーは、人生の中で自己の非存在の感覚を絶えず抱えて生きてきたのであった。

次の引用で、23歳の文学部の学生である「彼女」は、中産階級に属する級友に囲まれて、強烈な孤独を感じるとともに、幼年期を過ごした労働者の、「向こう側」の世界とのつながりも見出せず、孤立無援な状態で、精神的危機に陥っている。

体格の良い美しい女性の姿をした彼女の写真を目にしても、彼女が最も恐れているのが精神錯乱 (folie) であることは疑いがたいだろう。彼女が書くことしか——おそらく男性しか——眼中にないのは、せめて一時的でも、それから自分を守るためだ。彼女は小説を書き始めたが、そこでは過去の、現在のイメージ、夜に見る夢と将来の想像物が、彼女自身から分離した分身である「わたし」の内部で、代わる代わる 続いている。

彼女はいかなる「自我」も持っていないことを確信している。(Ibid., p.92)

現実の世界に居場所をなくしたこと（「彼女は自分がどこにもいないと、ただし知識と文学の中にいると感じている」(Ibid., p.90)）によって引き起こされた「精神錯乱」の只中で、救済を求めて「彼女」が執筆した小説に描かれた自己像は「彼女」の現実の体験を反映したもので、自分の過去について抱いたイメージ（「彼女の後ろで彼女の人生は関連のないイメージで構成されている」(Idem)）と極似している。それらは一貫性と関連性を欠き、現実性を喪失した、混沌とした当時のエルノーの自己の状態を表している。しかしながら、それを1963年のエルノーに限定するだけで十分だろうか。『歲月』の前半で展開される様々なイメージの羅列は——「現実のイメージ、あるいは想像のイメージ、睡眠の中にまでやってくるイメージ、イメージにのみ帰属する光に浸された瞬間のイメージ」、「死者と生者を、実在の人間と空想の人間を、夢と歴史を対置する」記憶のイメージ (Ibid., pp.14-15) ——は、私たちに彼女の処女小説を想起させる。40年後のエルノーも変わらず、疎外的な、非「自我」的な自己を生きているといえるのではないか。出自の階級からの離脱、結婚生活、恋愛などの、様々な外的、社会的原因によって引き起こされた、虚無、疲労、非現実、麻痺といった疎外的、非人格的といわれる状態に付随する感情が『歲月』には記録されている<sup>18</sup>。それは「彼女」の自我にかかわる非常に個人的な感情、個別的な体験であり、先に述べたようなエルノーの自己と自己観を保存、強化して



きたにちがいない。一方で客観性を目指す自伝においてこれらの私的な感情が強調されるのは、それがエルノーの創作行為と作品の内容と形式（特にこの『歲月』の執筆）に密接に関連しているからであり、非人格的自己の所有者であるエルノーにとって、自伝の創作は自我同一性を前提とする従来の自伝からの脱却を出発点とし、文法的人称も含めた形式の探究を志向している理由を説明するものだからである。

また、「女性であり、被支配者階級の出身である私は、自分を『私自身の歴史の主体』であると感じていない（感じなかった）。（…）彼女を理解し、現実のものにするには、私を通り過ぎた人々を探るより他に方法はない<sup>19</sup>」と作家は述べ、己の人生における主体性も否定している。（『戸外の日記』にも同じ言及がある。）ここで本論稿の冒頭で言及した『歲月』で構想される自伝を想起したい。「まるで自分の番になれば、彼女がその日までの日々を語るかのよう」という表現によって示されるのは、複数の他者が携わって出来る一冊の自伝である。語り手の「わたし」の不在についてはすでに言及したが、エルノーの作家としての経歴も『歲月』からは排除されている。語り手が執筆するのは「わたし」の自伝でも、「作家エルノー」の自伝でもなく、「第二次大戦から今日まで（…）生きてきたひとりの女の、彼女自身の目には、ほんやりとして特徴なくみえる人生<sup>20</sup>」の記録、「彼女の、誰かの自伝で、さらにいえば、人から人へ継承される集団的な自伝である。つまり、それは固有名で示される人物の自伝ではなく、無名の人物の自伝であり、語り手の第一人称の消滅が、本の表紙に書かれた名前を無化しているともいえるのである。

### 3. 集団の自伝へ

続いて、前章とは正反対の、集団・社会の歴史に個人の特性を付加する動きへと移る。作者の個人性の導入によって、事実の堆積である社会の歴史が付帯する客観性は希薄化されるのであるが、個人性の導入には幾つかの段階がある。第一に、記述されている社会や歴史に関する項目は、全て作者の記憶の中、自己の内部に保管されているものである。それは、執筆

のために新たに歴史書や資料から（外部から）収集して得た情報ではなく、彼女が生活の中で知覚し獲得した、社会に関わる出来事や物事についての知識（「うっかり生きながら記録されたなにか」「自己の中にある世界の記録」<sup>21)</sup>）であることを意味する。実のところ、それは社会歴史のテキストにのみ関わる問題ではなく（当然、個人の歴史は作者の記憶と不可分である。）、作品の存在という根底にかかわる問題である。第二に、テキストで取り上げられている事象は、政治、社会、経済と幅広い分野を網羅しているとはいえ、項目の選択には作者の個人的な嗜好、関心、判断が見え隠れする。また、記述の頻度や長さにもばらつきが見られる。最後に、記述の形式の問題である。第一人称による主観的な記述が、歴史的出来事の記述に人間性や情感を付与している。具体例をもってみていこう。

次の引用は、60年代に開始されたパリを中心とするイー ル = ド = フランス地方のニュータウン建設に伴って起きた、都市郊外への人口移動に関連している。

人々は家を出た。パリ周辺40キロメートルの新しい都市に居を構えた。花の名前がついた通りの、完成しつつある分譲地にある、休暇村のように色彩溢れる（木製の）軽い家。扉のばたんと閉まる音はバンガローの音だった。一列の鉄塔が横切る畑沿いの、イー ル = ド = フランスの空の下にある、静かなむき出しの場所だった。

（…）街の境界を想像するのは不可能だった。あまりにも広大な空間の中を浮かんでいる感じがした。存在が希薄になった。そこを散歩することに意味はなく、悪く言えば、自分の周りを何も見ずに運動着で走ることを意味した。人々は、古い都市の、車と歩道に通行人がいる通りの痕跡を、体の中に保管していた。地方からパリ地区へ移住することによって、時間が加速した。持続性の感覚はもはや同じではなかった。夜が来ると、苛立った学級での取るに足らない授業を除いては、何もしなかったという印象をもった。（*Ibid*, pp.132-133）

テキストは新しい街で暮らし始めた住人の視点から描写される。眼差しが自宅からその周辺へと移動し、都市での生活による時間感覚の変化も語られている。書き出しの代名詞「人々 (on)」は同じ断章内の「35歳以下のわれわれ」、新しいパリ郊外の移住者とも関係を保っているため、テキストは彼らに一定程度共通する体験として読まれうる。しかし、最後の一文（下線）が示す限定された状況により、個人的で、限定的な体験の記述へと突如変貌し、「人々」の前に作者が姿を現す。哲学者の木村敏によれば<sup>22</sup>、第一人称で体験される「私」の世界は、知性や悟性によって実在するものを客観的で合理的に捉える三人称的世界と異なり、生きている現実の日常生活を主観的で私的な感情や価値観で捉えられる世界である。日常生活に密着した記述内容（休暇、散歩、ランニング、学校）、印象（「存在が希薄になった」「時間が加速した」「苛立った」）、身体感覚（音や色彩の記載、「浮かんでいる感じ」）を表わす語が、主観的な印象を与えているし、想像する、感じる、意味づけるといった動詞は行為の主体を強く要請するものである。また、住居や街についての記述も具体的かつ詳細で（材質、色、通りの名前）、現実性を高めるのに役立っている。では、このテキストに表現されている主観は誰なのかという問題が浮上する。結論からいえば、それは「人々」、「35歳以下のわれわれ」、パリ郊外の新しい住人、エルノー本人の全てである<sup>23</sup>。引用からは現実に生きられた、特異で個別的なエルノー個人の体験のように見えるが、第一人称で語られる自己の世界にある生々しい現実感を共有する集団は、規模の大小にかかわらず、「われわれ」を形成できるという木村の指摘を考慮するならば、エルノーの個人的体験を追体験できる読者との間には、「われわれ」という第一人称で指示することのできる集団、共同帯の形成が可能といえる。したがって、このテキスト上の「われわれ」は、現実に存在する、カテゴリー化された集団というよりはむしろ、予知的で偶然的かつ想像的な共同帯といえるだろう。

『歳月』の中で「われわれ (nous)」や「人々 (on)」によって指示される集団は、断章の中でその種類を変貌させる。親・子・孫といった世代によって区切られた集団、子ども・若者・大人など年齢・年代によって区切

られた集団、そして状況の限定された政治集団（デモ・ストライキの参加者）、社会学が公衆、群衆と分類するような、規模の拡大した、帰属意識の希薄な、時代を象徴する集団（消費者・世論・視聴者）等、場合に応じて様々である。記述される社会・歴史的出来事は、この章の冒頭でも述べた通り、歴史の外部の時間から歴史家の視点に立って語られているのではない。エルノーがその時代を生きながら見聞きし、時に実際に参加した歴史である。したがって、必然的にこれらの出来事には、20代から60代までの当時のエルノーの視点や自己との関係性が反映されることになる。それはおよそ戦中・戦後生まれの人々から見た20世紀のフランス社会の記述であり、まさにエルノーの同世代、同時代人の歴史といえる。この同時代性の意識は1999年に寄稿文の中でより明確な形で言及されている。

私には、われわれ皆を統合していたなにか、われわれを今世紀の人々にし、次世紀に、言葉でもイメージでも伝達できないだろうなにかが終るのを感じた。サルトルの表現を借りれば——「マルローと共に、どこかで、私は新時代を画する」——皆、およそ70年より前に誕生した者たち、協力して、われわれは新世紀を画する。明白だが、ナチスとスターリン、アウシュヴィッツとヒロシマ、アルジェリア戦争の記憶によって、さらには、これらの悲劇にわれわれは関与したし、責任があったという確信によって。ジオノの小説で子供だった、SF映画の中で大人だったというこの印象——社会の変動がとても急速だった——によって。しかし、われわれを最も統合するのは、おそらくその時のわれわれの生き方であったために、定義することを考えることも決してなかったにちがいない様々な感覚である。未だ物の希少性の中を生きていた50年代に広がっているあの緩慢さと沈黙、70年代の言葉は、教室、壁、いたるところに沸くように現れ、生活様式としての討論と、子供たちが何でもする権利がある一方で、松明やギター弾きの周りで、夜アルデーシュで感じたあの「新世界」の感覚。そして80年代の厳しさ、毎日地下鉄で排除の恐ろしい声を迎える沈黙の中に

含まれた、存在するものの異様な受容<sup>24</sup>。

同時代性の意識は、伝統的価値観の転覆を引き起こした五月革命によって分断されている。「われわれ」=革命以前に生まれた人々を結びつけているのは、戦争の記憶、自己の身体によって測定される社会的発展の速度、そしてエルノーが最も重視し、集団の凝集力を高めていると考えるのが、当時の生き方そのものであった感覚である。これらは全て、彼らの個人の肉体と感情・感覚に深く結びついているという特徴がある。フランス国外で起こった戦争に関して、彼らは映画やドキュメントを通して知ったことで、自己の無知と無関心を「社会的恥」として心に刻んでいるのである<sup>25</sup>。彼らの体験は、公共の、集団的な場（教室・キャンプファイアー・地下鉄・映画館）でしばしば行われているため、抱かれた感覚は、身体的という意味では個人的であるが、その場で、あるいは生活の中で、一緒に共有され、時に交流されたものという意味で、より集合性の高い一体的な感覚といえるだろう。

これまで集団の「歴史」という表現を使用してきたが、同時代人の歴史はむしろモーリス・アルヴァックスの定義した「集合的記憶」に共通性を見出す。「それ（=集合的記憶）は連続的な思考の流れ、ある連続した流れであって、何ら人為的なものを持たないのである。というのは集合的記憶は、過去から、その記憶の中で、今なお生きているものしか、あるいは、その記憶を保っている集団の歴史の中で生きることのできるものしか保持していないからである。<sup>26</sup>」このような集団の中に生を保ち続けている記憶は、テキストの中で動詞の時制によって巧みに表現されている。一般に「記憶を遡って得られる『かつての現在時』」、「過去における現在」を示す時制である半過去形 (*l'imparfait*)<sup>27</sup>は、通常の現在形（現在進行形も）がもっている、変化し続ける生の現実を表わす主観的な時間で、「第一人称」的な時間を表わしているといえよう<sup>28</sup>。作者は『歲月』を「連続した、完全な、未完了なもの (*un imparfait*) の中で、人生の最後のイメージに至るまで、徐々に現在を飲み込んでいく流動的な物語」(*Ibid.*, p.251) と表現し

ており、ここで半過去形の過去と現在は地続きである。一方、「第三人称」の時間は、完了した過去の時間で歴史の時間に相当する。時間の長さが消し去られ、年号を付与され、「発見物、文学作品、芸術的作品、戦争、イデオロギー、すべてが列挙され、分類され、評価され」る (*Ibid.*, p.215)。それは集合的記憶の時間とは正反対の時間といえよう。『歲月』での時間表記に関しては、幾つかの歴史的な重要性のある年号が記載されているが(1968、1981、2000年等)、○年代という表現で時間のある一定の幅を表現することによって、集合的記憶の性質である連続性、継続性が表されている。挿入される写真は、撮影年度が記載されている点において、被写体の成長や老化によって変貌する身体がある種の圧縮された時間を表わすという点において、歴史の時間を表わすといえる。しかし、エルノーは一連の写真を「定期的な間隔で中断された持続」「記憶の休止」(*Ibid.*, p.251, 252)とみなし、非連続性と静止の特性の方を強調して、集合的記憶の時間との対照性を際立たせているように思える。過去が永遠に再現されるという写真特有のこの現在形と、過去の現在を示す半過去形を比較すると、前者が瞬間性を、後者が不完了、継続を表す。つまり、現在形はつねに静止したイメージの形で、一瞬単位で訪れるのに対して、半過去形の時間は、忘却され、歴史になった時点から、現在の一瞬にまで長く続いた、流動性のある生の広がりなのである。

同時代人が形成する集団より限定的ではあるが、より強い感情で結束する集団についても言及しておこう。それは社会的抑圧者と呼ばれる人々である。次の引用は60年代、帰省した大学生が両親とその友人と共に食卓を囲む光景である。

ヴァージニア・ウルフの『波』やステゼルの『社会心理学』を読むのに費やしたであろう数時間の必要な犠牲という気持ちで——(…)小遣いを与え、持ち帰った洗濯物を洗ってアイロン掛けしてくれる両親に対しての——、進んで、不器用ながらも会話に加わった。不本意

であるが、皿のソースをぬぐう、カップを揺らして砂糖を溶かす、敬意をもって「地位の高い人」と言うのに気付いて、突然、外部から家族の階層を知覚した。もはやわれわれのものではない閉鎖した世界のようにだった。われわれから離れない考えは、病気にも、月が満ちるときに植える野菜にも、工場を解雇された人達にも、ここで交わされている会話にも、無縁だった。(Ibid., p.88)

『歲月』には社会の政治・経済・文化の分野での変化だけでなく、時代による家族の変遷も描かれている。ここで指示されている「われわれ」は、引用以前の食卓の光景で使用されていた、両親世代に対する子世代（ここでは若者、20代）を示すだけにとどまらず、進学によって出自の階層から抜け出し、別の階層へと移動しつつある集団であることを下線部は明瞭に示している。これらの具体的な記述から読者は、文学と社会学への関心からエルノーを、粗野な振る舞いと農業・工場・病への関心から『場所』で描かれた年配になった彼女の父親を、娘の身体を管理し続ける『ある女』の母親を想起するにちががなく、「われわれ」を作者本人と同一視するのに疑う余地はない。この「われわれ」の使用は何を意味するのか。それはエルノーが社会学者ピエール・ブルデューへの追悼記事<sup>29</sup>で用いた「友愛」の情を理由とした『われわれ』の使用と同等といえる。社会的原因によって引き起こされた、苦痛を伴う孤独な体験を過去にもちながら、「ピエール・ブルデューの著作の発見が、世界についての知覚と生活を転換した、全分野の男女」に対して、「『われわれ』と呼びかけることによって、エルノーは、自己と彼らの間で、わたしとあなたと呼び合うような、相互二人称的な親密な関係の集団、ブルデューを介した「友愛」の情によって結束する、孤独を解放するための共同帯を形成しようとしているのである。

#### 4. まとめ

以上、私たちは『歲月』の中に働く二つの相反する力——自伝を非個人化へ、歴史を主観化へと導く力——をみてきた。文法的人称を中心にした

文学的形式の角度から、具体例を提示し検討してきたが、そこに認められる作者の様々な配慮は、このテキストが他の人文科学の領域でなく、やはり文学的なものであることを裏付けるものだった。自伝の非個人化は、記述の形式のみならず、作家の（非）人格形成に由来するものであることが明かされた。孤独で非主体的な自己であるからこそ、居所を求めてより強く集団や社会への帰属を切望するのは当然といえよう。様々な過去や感情を共有する他者と、作家は文学の中で想像的な共同帯を形成しようと試みる。言及した三つの集団は互いに緩やかに重複しながら大きな集団的自己を構成していると想像できるだろう。しかしながら、その内側にある無数の、身体のない感覚や主のない声をどう理解すべきか。このように考えると、「autobiographie impersonnelle」をどのように訳すかという問題への解答は、ますます先送りされることになるのである。

注

1. Annie Ernaux, *Les années*, Paris, folio, 2008, p. 252. 下線は筆者。以下の引用文内における下線も全て筆者。以降、本文、脚注内では LA と記す。
2. 次の辞書を参考にした。 *Le nouveau petit robert de la langue française*, Le Robert, 2008 / *Le Trésor de la Langue Française informatisé*, CNRS, 2004.
3. Voir Fabrice Thumerel (éd), *Annie Ernaux, une œuvre de l'entre-deux*, Arras Casex, Artois Presses université, 2004. エルノーの作品の学際性を示す。
4. フィリップ・ルジュンヌ 『自伝契約』花輪光訳、水声社、1975年、18頁。
5. ジェラルール・ジュネット 『物語のディスクール』花輪光、和泉涼一訳、星雲社、1972年、286-297頁。『フィクションとディクション』和泉涼一、尾川直哉訳、水声社、1991年、第三章。
6. Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu*, Paris, Gallimard, 1919-27. / マーガレット・ミッチェル 『風と共に去りぬ』大久保康雄、竹内道之助訳、新潮文庫、1936年。
7. ジェラルール・ジュネット 『物語のディスクール』222-237頁。
8. フィリップ・ルジュンヌ、前掲書、19頁。
9. Annie Ernaux « Cinq avant-textes des *Années* » dans *libr-critique.com* : actualité des littératures contemporaines, (en ligne), <http://www.t-pas-net.com/libr-critique/ dossier-annie-ernaux-3-annie-ernaux-cinq-avant-textes->



- des-annees/, (page consulté le 28 février 2014)
10. Annie Ernaux, *La place*, Paris, folio, 1983. (『場所』堀茂樹訳、早川書房、1993年) / *Une femme*, Paris, folio, 1987. (『ある女』堀茂樹訳、早川書房、1993年) / *L'atelier noir*, Paris, Busclats, 2011, p.69 : « 24 novembre Réfléchi : je veux faire la même chose sur « moi » que j'ai faite sur mes parents ( donc dire que je vais être sociologue de moi même ? pas seulement de moi ) » 『歲月』の計画時に両親の伝記を意識していたことが分かる。
  11. Annie Ernaux, « Cinq avant-textes des *Années* ».
  12. Voir Lyn Thomas « A la recherche du moi perdu : memory and mourning in the work of Annie Ernaux » in *Journal of Romance Studies*, vol. 8, n° 2, summer 2008, pp. 95-112.
  13. Annie Ernaux, *La place*, p. 45. (前掲書、52頁。)
  14. Voir Michèle Bacholle-Bošković, *Annie Ernaux: de la perte au corps glorieux*, Rennes, Presses universitaires de Rennes, 2011, Chapitre II.
  15. Annie Ernaux, *Journal du dehors*, dans *Ecrire la vie*, Gallimard Quarto, 2011, p. 504 (1993). (『戸外の日記』堀茂樹訳、早川書房、1996年、21頁。)
  16. ロラン・バルト『明るい部屋 写真についての覚書』花輪光訳、みすず書房、1980年、23頁。他者性と自己同一性についても言及している。「写真は、自分自身が他者として出現すること、自己同一性の意識がよじれた形で分裂することを意味する」(p.21)
  17. 「しかし《かれ》は、無数の主体でもありうるし——また何の主体でもないこともある」エミール・バンヴェニスト『一般言語学の諸問題』岸本通夫監訳、みすず書房、1983年、209頁。
  18. « cette sensation d'être abandonnée »(LA, p.70), « Elle se sent très seule »(p.80), « elle s'y ennuie »(p.90), « boule d'impuissance, de ressentiment et de délaissement »(p.147) 木村敏『自己・あいだ・時間：現象学的精神病理学』ちくま学芸文庫、2006年、ピエール・ジャネー『人格の心理的発達』関計夫訳、慶應通信、1929年、第五章を参照。
  19. Annie Ernaux, « Cinq avant-textes des *Années* ».
  20. *Idem.*
  21. *Idem.*
  22. 木村敏『関係としての自己』みすず書房、2005年、55-57頁。
  23. 「《わたし》の優越性が、ここではきわめて強く、一定の条件のもとでは、この複数は単数の代わりをつとめうるほどである。その理由は、《わたしたち》が量化ないし倍化された《わたし》ではなくて、厳密な人称を超えて、増大されると同時に輪郭のぼやけた、膨張した《わたし》であることである。」エミール・バンヴェニスト、前掲書、214頁。

24. Annie Ernaux, « De l'autre côté du siècle », in *La nouvelle revue française*, n° 550, juin, 1999, pp.99-100.
25. *LA*, pp.158-159.
26. モーリス・アルヴァックス 『集合的記憶』 小関藤一郎訳、行路社、1950年、88頁。
27. 朝倉俊一共著 『改訂版フランス語ハンドブック』 白水社、1996年を参照。
28. 木村敏 『関係としての自己』 第二章／『時間と自己』 中公新書、中央公論社、1982年、モーリス・アルヴァックス、前掲書、第三章を参照。
29. 「われわれは彼（＝ブルデュー）の死の悲しみをこれほど感じているところなので——彼の死の知らせで自然発生的に広がった友愛の波のために、私はめったにしないことをする、『われわれ』とあえて言う——これほど大勢のわれわれが、彼の発見と概念、彼の著作の影響は広がり続けていくと考えている。」Annie Ernaux, « *Le chagrin* » dans *Ecrire la vie*, *op. cit.*, pp. 912-914 (2002).